

日

本人は「顔がない」といわれて久しい。礼儀正しいがステレオタイプだと思われている。ことにヨーロッパに出かける団体旅行者は、彼らにとってはありがたいお客だが笑われていることも事実である。それでもパブルの頃は日本は経済力があり世界の文化事業にかなりの貢献をしていたので、それなりの評価と尊敬を得ていたと思う。

しかし、経済の沈滞が長く続いて、日本国内はいまでもなく海外への投資の撤退も相次ぐために、日本人の存在感は急激に軽くなってきた。かつて礼儀正しいといわれていたことが卑屈にさえ見えてくる。

国境が低くなり、科学も進歩し、情報がすごいスピードで地球を駆け巡るようになってきた。日本人同士なら以心伝心で容易に理解できることでも、ニュースとして日本のさやかな出来事まで世界中に伝わる最近では、日本や日本人に対する誤解となつて話題になる。外国できちんとしたい仕事をしている日本人たちにとっては迷惑な時代だと思ふ。

これまで日本の教育は知識の詰め込み主義で、平均的であることが重視されてきた。それによつて戦後五十数年、一般の知識の水準の質が底上げされ、国力に貢献したことは事実である。しかし、日本人はステレオタイプで顔がないといわれている今、教育の方向を

暮らしの現実を見つめて、的確な計画を立ててほしい。日本は公共事業に多額の税金を投入してきたけれど、果たして人間中心、文化の将来を眺めた遠大な計画を考え実行されてきただろうか。

日常生活では、道は人が歩くためにある。人間の行動の基本は歩くことだと思ふ。今の都会では気分よく歩くことはできない。車の問題だけでなく、歩道といわれるところも自転車走って行く。アグリーな景観の歩道橋は誰のため、何のためにあるのかといつも感じる。

また電柱、目立つ表通りはきれいな電柱が、横丁に入ればたくさん電柱に電線が錯綜している。見苦しい上に地震でもあれば大惨事になると思う。この電柱についてはもう何年も話題にされている。縦割りの行政上、いろいろ問題があるのかもしれないが、目立つところだけきれいにして裏の方は見えないという感覚は貧しい。

まず、私たち日本人のルーツ「日本文化」とは何かをしっかりとおさえる教育が必要だと思ふ。欧米風のグローバルスタンダードにとられすぎて、日本の良さを忘れてはいないか。日本は魅力的な独特の文化を持っているのに自信をなくしているのではないかと思ふときがある。日本はアジアの中でも小さな国

文化と科学の融合

論 文



デザイナー 森 英恵

大きく転換させることを真剣に考えるべきではないか。西欧の人たちは日本人は画一的で人まねが得意だと思っている。ヨーロッパの有名ブティックに群がるブランド好きの日本人の買い物風景を見れば、そう思われても仕方がない。

二一世紀を目前にして、文化に対する根本的な政治的施策——文化政策が緊急に問われていると思う。二〇世紀の終結を目前にして、

土である。しかし季節の移り変わりがはつきりしていて、四季折々の美しい自然に恵まれている。緑が少なくなったといわれるが飛行機から眺める日本にはかなり豊かな森が存在している。

日本人として、日本に生まれた私たちのルーツ、伝統や歴史、感性を、まっすぐ見つめて考える。その上で、それぞれ個性のある子どもたちの特徴を磨き上げ、魅力的な発表能力や個性的な表現力を磨く教育が必要だと思ふ。また、知識と体育のバランスのよい学校教育を考へる。外国で見かける私たち日本人は体格が貧弱だ。姿勢が悪い。歩き方が美しくない。

ヨーロッパのアーティストが原宿に集まる奇妙なファッションを身につけた若者たちを見て、日本の若者たちは何も考えていないように見える。それぞれの変わったスタイルは社会に対する反抗の精神からではなく、ただ自己表現をしたい、いい格好をして自分に投資することが希望のように感じる」と。これは世紀末の退廃からくる現象なのだろうか。

二〇世紀、戦後の貧しい時代、物の豊かさを求めて、私たちはすごい勢いで自然を破壊してきた。森の木を伐り、森を住みかとする動植物は生きる場を失い、街には排気ガスが充満し、アレルギー症状の子どもたちが増え

地球的な視野でこの世紀は何だったのかを考えてみる。戦争、貧困、人種差別、エイズ、自然破壊、ゴミ、大気汚染……。産業重視で物は豊かになったが何か物足りない。心にすきま風が吹き込んでくるような淋しさ。

文化とは人々がお互いに心地よく豊かに生きていくことを支えるすべてのこと、つまり人間が生きていく上での精神的な必需品だと思ふ。二一世紀は文化が最も重視される時代になってほしいと願う。教育を享受している若い人たち、社会で活躍している成人たち、リタイアして老後を過ごす人たち……すべての人が競争社会での勉強や仕事一点張りではなく、健康で心豊かな時間が持てる生涯のライフスタイルである。

最近、アメリカのボストンに行ったときのこと。ホテルから飛行場に向かう車の中で、大工事中の道にさしかかったら運転手さんが得意そうに話してくれた。もう五年近くもやっているけれど、すっかりできあがるにはあと一〇年もかかるかもしれない。高速道路を全部地下に埋めてしまうという工事です。よ。高速道路のあとには緑いっぱいの公園などにする計画。排気ガスも騒音もない、人間がゆっくり歩ける環境になる」と。

ここでは文化の二一世紀の動きが始まっている、と感じた。公共事業も、時代や人間の環境ホルモンも問題視されている。

目前にせまった二一世紀は明らかに科学の時代になる。大切なことは科学と人間性の調和、よい共存だと思ふ。危険に感じるのには科学によつて人間性が失われていくのではないかとということである。「人間の敵は人間」という誰かの言葉が心に残っている。コンピュータの進歩で便利になったが、人間の機能を退化させる面も大いにある。子どもを生みたくないという女性が卵子を買いいたいといった広告を目にしたこともある。自然に生まれるはずの母性愛の喪失につながるのではないか。インターネットによる犯罪も増加している。

科学の進歩によつて人間性が失われるということは、言い換えれば「文化」が希薄になるわけで、そんなかつて経験したことのない事態を回避するためにも、これからの文化政策はきわめて大切だと思ふ。

天然資源の少ない日本は人間が貴重な資源だ。主役は人間である。小さくても、本当に文化度の高い国でありたい。魅力的な個性のある人間の集団でありたいと願う。国民に豊かな希望をもたらし、地球人として地球に貢献する総合的な文化政策を迅速に実現していただきたいと切に願う。